



地域とともに

まちなかにある大阪国際空港は、人々の暮らしとともに歴史を重ねてきました。空港と共存する、これまでの道のりと周辺施設をご紹介します。



- 主な環境対策の歴史
- 1965年(昭和40年) ジェット機の23時～翌6時の発着禁止。
- 1974年(昭和49年) 航空機騒音防止法改正。
- 1977年(昭和52年) 1日の発着回数制限370回。
- 1984年(昭和59年) 航空機騒音訴訟和解成立。
- 1990年(平成2年) 大阪国際空港に関する存続協定を締結。
- 1997年(平成9年) ふれあい緑地オープン。
- 2002年(平成14年) 大型防音壁(エンジンテスト場)使用開始。
- 2006年(平成18年) 3基以上のエンジンをもつジェット機の乗り全面禁止。
- 2010年(平成22年) 騒音対策区域の見直し。
- 2012年(平成24年) 関西国際空港及び大阪国際空港の一体的かつ効率的な設置及び管理に関する基本方針を策定。

大阪国際空港では、昭和39年(1964年)にジェット機が就航して以来、周辺地域における騒音問題がますます深刻化しました。国はジェット機の発着時間を段階的に制限するほか、「航空機騒音防止法」(昭和42年)を制定し、周辺

地域住民への移転補償や公共施設・民家への防音工事等を進めました。こうしたなか、空港周辺住民が国を相手に夜間飛行の差し止め等を求める訴訟を提起しました。この訴訟は、国を相手にした初めての公共事業の差止訴訟で、和解交渉により夜間飛行禁止が合意されました。

その後、騒音対策や環境整備が強化され、地域とともに空港を活かしたまちづくりが進みました。

騒音対策地域の移転補償跡地の有効活用で生まれたのが「ふれあい緑地」(服部西町4・5丁目、服部寿町3・5丁目)です。緑地内には、温水プールなどのスポーツ施設や長いローラー滑り台を備えた遊戯広場、水辺ヒートアップ、広大な芝生広場があり、いまでは多くの市民でにぎわう場所となっています。低騒音機の導入や発着時の工夫などにより、騒音はかなり改善されましたが、環境基準は未達成(平成29年度)です。住環境の保全と空港による地域活性化を両立するために、市と市民による取り組みはこれからも続いていきます。



「空港を活かしたまちづくり」 ふれあい緑地 (服部西町・服部寿町)



離着陸時の騒音軽減方式
離陸時には、一般的な離陸に比べて急上昇することや、着陸時には、空気を抵抗を減らしてエンジンの推力(進行方向に押し進める力)を小さくするために脚下げを遅くするなどの運航上の工夫が行われています。

「とよなか 救命力世界一宣言」 豊中市消防訓練場 (原田中)

大阪国際空港の南東に位置し、着陸寸前の飛行機が真上を飛ぶ豊中市消防訓練場。ここでは、消防職員や消防団員により、ポンプ操法をはじめとする消火訓練や、さまざまな救助現場を想定した救助訓練が行われています。

毎年8月に開催される全国消防救助技術大会に向けて選考試験で選ばれた精鋭たちによる救助特別訓練隊を編成。引揚救助訓練と障害突破訓練での全国大会出場をめざして、厳しい特別訓練を重ねます。



着陸間際の飛行機から見る「とよなか 救命力 世界一宣言」。

「救命力世界一宣言」とは
豊中市は、人口に対する救命講習修了者数の割合や、市域面積に対する救急隊数、救急救命士数の割合が全国トップレベル。また、豊中市が属する豊能二次医療圏は、高度な救命処置を担う医療機関が充実しています。豊中市は、市民、事業者、救急隊、地域医療の連携により、世界で一番と言えるほどの高い救命率を誇ることから、平成22年に「救命力世界一」を宣言しています。



引揚救助訓練は、地下やマンホールなどの災害を想定して、5人1組(要救助者含む)で行います。

「みどりのまちなみと“ごみ”を活かすために」 原田苗圃 (原田中)



初心者でも一から教えてもらって、おいしい野菜が作れる「とよっぴ農圃」。自分で育てた野菜は野菜嫌いの子どもも喜んで食べるそうです。

千里川をはさんで大阪国際空港の南端に隣接する市営原田苗圃(原田中)では、「花とみどりのまちづくり」を推進するための取り組みの一つとして、地域の団体等からの希望に応じて樹木の配布を行っています。原田苗圃内の「緑化樹木見本園」には配布用の多種多様な苗木が植わっています。

苗圃の奥にある「緑と食品のリースイクルプラザ」は、学校給食の生ごみと街路樹等の剪定枝から堆肥(土壌改良材)「とよっぴ」を作る施設です。市と市民団体の協働による「とよっぴ事業」は、「とよっぴ」を使って市内の農業者が育てた野菜が学校給食の食材となる資源循環のサイクルをつくりだすだけでなく、「とよっぴ農圃」での農体験学習、地産地消費の流通などを生み出しています。毎年10月に開催される「とよっぴフェスタ」では、千里川の土手に隣接する原っぱが開放されて、真上を飛ぶ飛行機を見ながら、のんびり過ごす家族連れも多いそうです。